

2020/09/13

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑮

『神は昔も今も変わることはない』ヨハネ 5:30-47

✠ 証言

「わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」(ヨハネ 5:30)

神という方は三位一体で、父・御子・聖霊なる神が同じ思いを共有しており、独断で動くようなことはありません。そういう意味で、イエス様は「わたしは父なる神から聞くとおりに行う」と言われました。

三位一体とは、卵を思い浮かべるとわかりやすいかもしれません。殻と白身と黄身が一つとなって卵は形成されています。父なる神、子なるキリスト、聖霊が一つとなったのが、神なのです。

「もしわたしだけが自分のことを証言するのなら、わたしの証言は真実ではありません。わたしについて証言する方がほかにあるのです。その方のわたしについて証言される証言が真実であることは、わたしが知っています。あなたがたは、ヨハネのところに人をやりましたが、彼は真理について証言しました。といっても、わたしは人の証言を受けるものではありません。わたしは、あなたがたが救われるために、そのことを言うのです。彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです。」(ヨハネ 5:31-35)

この時、ユダヤ人たちは、イエス様をご自分を父なる神と等しくしたことに對して怒っていました。彼らにとって、それは神への冒瀆だったからです。しかし、イエス様がキリストであることは、バプテスマのヨハネも証言しています。イエス様ご自身は人からの証言を必要としていませんが、人間の目線に立って、ご自分が救い主であることを証しなさいました。イエス様が、ヨハネの証言を引用なさったのは、ユダヤ人の救いのためです。

「しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです。」

(ヨハネ 5:36)

私たちの社会では、複数の証言をもって真実かどうかをはかります。人間の目線に立った

第二の証言は、イエス様がなされたわざです。たとえば、ベテスダの池で38年寝たきりの人を癒したこと、100人隊長の死にかけていた子どもを癒したこと、それ以外にも多くの病人が癒されたことが挙げられます。これらが、自分がキリストであることを証言していると言っておられます。

「また、わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです。」(ヨハネ5:37-38)

第三の証言は、聖書です。聖書を通して、父なる神ご自身が、イエス様がキリストであることを証言しておられます。しかし、ユダヤ人たちにはそれがわかりませんでした。それは、彼らのうちに御言葉がとどまっていないからだとして、イエス様は言われました。当時のユダヤ人は、聖書をほとんど暗記していたにもかかわらず、御言葉を自分のうちにとどめず、神が遣わした者を信じませんでした。御言葉をとどめるには、どうすればよいのでしょうか。

それには、まずイエス様に応答することが必要です。「イエス様に応答する」とは、「救われる」ということです。救われなければ御言葉をとどめることはできません。救いとは、神の呼びかけに応答することですが、それは最初に潜在意識の中で起こります。ですから、私たちは救われた瞬間を自覚することはできません。しかし、潜在意識において神を受け入れた人は、助け主である聖霊が御言葉を食べさせてくれるので、御言葉を聞くと、それをとどめることができます。イエス様は、「私が戸をたたき、人がその戸を開けるなら、私はその中に入り、一緒に食事をする」と言われました。

戸を開き、神をお迎えした人は御言葉を食べられるのですが、心の扉を開かない人には食べるものはありません。それで、ほかのもので心を満たそうとします。救われた人は御言葉を食べて信じることで、救われた自覚を持つことができます。ただし、救いはあくまで神に応答したときのことですから、御言葉を食べなければ救われていないというわけではありません。

✠ 聖書の読み方

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」(ヨハネ5:39-40)

当時の聖書とは、モーセ五書のことです。モーセ五書は、BC400年ごろに認められ、それ以外の旧約聖書の詳細は、イエス様の十字架の後、90年ごろに決まりました。イエス様は、「聖書の中に永遠のいのちについて書かれているが、それは私について証言しているものだ。」と言っておられます。聖書は歴史書ではなく、イエス・キリストを証しする書なのです。旧約聖

書は後から来るものの影であると言われてはいますが、それがイエス・キリストです。しかし、ユダヤ人たちは旧約聖書に精通していたのに、イエス様のところに行こうとはしませんでした。このことは私たちに、イエス様と同じ見方で聖書を読まないで、その意味を読み違えてしまうことを教えています。

「わたしは人からの栄誉は受けません。ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。」

(ヨハネ 5:41-44)

神の愛とは、神を信頼することです。イエス様を受け入れないということは、神への信頼がないということです。彼らは、人のことばは受け入れるのに、見えないものは信じません。人間同士で互いの栄誉を受け取っているため、神の栄誉を求めもしないのですから、どうして信じることができるのでしょうか。私達も同様です。人からほめられる栄誉を求め、互いに栄誉を与え合い、神からの栄誉を求めようとしません。

イエス様は、種まきのたとえの中で、御言葉をふさぐもののひとつは、「世の心遣い」だと言われました。つい、神のことよりも人のことを思ってしまうので、御言葉が食べられないのです。

「誰も二人の主人に仕えることはできない」と聖書は教えています。人からの栄誉か神からの栄誉か、どちらかしか求められないのです。二つのものを同時に手にすることはできません。神の栄誉を求めましょう。それは永遠のいのちです。

「わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思ってはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みをおいているモーセです。もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」(ヨハネ 5:45-47)

モーセが書いたのはイエス様のことなのに、彼らが信じなかったため、イエス様はそれを「モーセがあなたがたを訴えている」と表現なさいました。

神は、モーセと燃える柴の中で対面したとき、「あなたは誰ですか」と聞かれて、「ありであるもの」とお答えになりました。それは、「私は存在するもの」ということです。これは非常に哲学的な表現で、哲学者にとって「存在する」とは「永遠に変わらない」ということです。人間もこの世界もやがては朽ちるものですから、哲学的には存在するものではありません。神は、「私は存在するもの」という表現をもって、ご自分は永遠に変わらないものであることをお示しになったのです。

ユダヤ人が激怒したのは、イエス様が同じ表現でご自分のことを呼んだためです。しかし、イエス様は、「モーセに会ったのは私だ」、つまり、旧約聖書の神は自分だと、はっきりと示しておられます。それは、父と子と聖霊は一つだからです。

✠ 神の思いは変わらない

神は永遠であり、昔も今も変わることがありません。つまり、旧約聖書の神の思いも、新約聖書の神の思いも、まったく変わらないのです。変わる事のない神は、どのような思いを持っておられるのでしょうか。

「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。」(ヨハネ 12:46-48)

闇とは死のことです。イエス様は私たちを、「死人」と呼ばれました。人間は神と同じのちで造られていますから、もともとは永遠です。ところが、悪魔が持ち込んだ死によって、人間は滅びるものになってしまいました。どんな罪人であっても、死を宣告されている人間に、それ以上の罰は意味がありません。神が死んでいる者にできることは、生かすことだけです。神が私たちのためにする行動の全ては、私たちを救うためであって罰を与えるものではありません。

「さばく」の言語は、「分ける」という意味です。神の救いを受け入れなければ、神のいのちから分けられたまま、闇の中にとどまることになるのです。神は私たちを闇から引き出すために、常に御手を差し出しておられます。イエス様は、「私が来たのはさばくためではなく闇から救うためである」と語り続け、その思いがうそではないと示すために十字架に架かり、罪を帳消しにし、復活して、イエス・キリストを信じる者は死からいのちに移ることを自ら示して証しされたのです。

人は、罪に対しては罰があるものと思い込んでいます。しかし、神の思いは、罪に対してはあわれみです。罪は病気であるから、なんとしても助けたいと願い、十字架にまで架かられたのです。イエス・キリストの十字架は、罪をいやすための十字架です。

この世界の常識は、善い行いをすればほめられ、悪い行いをすれば罰を受けるというものです。この思いがあるために、聖書を読むとき、人は無意識に罪には罰があるというメガネをかけていて、旧約聖書の神は恐ろしい神だと思ってしまうのです。しかし、イエス様は、私はさばくためではなく、助けるために来たとはっきり言っておられます。このイエス・キリストと同じメガネをかけなければ、旧約聖書を正しく理解することはできません。旧約聖書はイエス・キリストを証しする書だからです。

✕ 勘違いの例(ノアの洪水)

たとえば、ノアの洪水について、多くの人は、神は悪を行う人間を怒って滅ぼしたと思っています。しかし、それではイエス様の福音とまったく合いません。これは、人間的な標準で理解したものであり、この考え方では、父なる神は恐ろしい神でイエス・キリストは愛の神であるとか、昔は悪に対して怒っていたのに今は怒っていないとか、聖書の教えとひどく矛盾してしまいます。

神は三位一体であり一つです。そして、聖書は「イエス・キリストは昨日も今日もいつまでも同じ」だと教えています。ですから、旧約聖書の出来事についても、キリストのメガネ、つまり、イエス様のものの見方で、神のなさることを理解しなければなりません。

「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」(創世記 6:5-6)

イエス様は、ヨハネの福音書の中で、旧約聖書の神は私だと語っておられます。そして、同じヨハネの福音書の中で「私は人々を救うために来た。誰のこともさばかない。」と語っておられます。それなのに、旧約聖書では「人を造ったことを悔やむ」と言っておられるので、とても同一人物の言葉とは思えず、多くの人が混乱しています。

そこで、一つの疑問が生まれます。神は本当に「人を造ったことを悔やむ」と言われたのでしょうか。

「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさらないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。」(民数記 23:19)

全知全能の神が、ご自分が生んだものに対して、生んだことを悔やむなどということはありえません。そこで、創世記 6:6 で「悔やむ」と訳されていることばを調べてみると、「ナーハム」という言葉で、通常は「憐れむ」と訳されます。旧約聖書で「憐れむ」と訳されていることばは、すべて「ナーハム」です。この言葉には、「憐れむ、残念に思う、悔やむ、復讐する」という意味があります。なぜ、ここでは「悔やむ」と訳されたのでしょうか。

旧約聖書はもともとヘブライ語で書かれています。しかし、長い歴史の中でイスラエルは散り散りになり、最終的にユダヤ民族は、ヘブライ語とよく似たアラマイ語を母国語とするようになりました。その結果、今の私たちがそのままでは古文を理解できないように、ユダヤ民族もヘブライ語を理解できなくなりました。さらに、その後、公用語はギリシャ語になり、ヘブライ語は完全に死語となり、紀元前 3 世紀頃には、聖書はギリシャ語に翻訳されたものを使うようになりました。

この時、もともとヘブライ語という単純な言語がギリシャ語に翻訳されることで、より深い意味をもった言葉で表現されることになったのです。神の言葉をひとつひとつ吟味して翻

訳する作業は、とても神の靈感が働かなければできるものではありません。この翻訳は「70人訳」と呼ばれ、イエス様やパウロが「聖書」と呼んでいたのは、この聖書です。この聖書のことを、パウロは「神の靈感によって書かれた」と言っているのです。ですから、クリスチャンにとって「聖書」とは70人訳聖書であり、ルターの時代までは、この70人訳を元に聖書がされていました。

しかし、宗教改革後、旧約聖書はヘブライ語から直接翻訳するようになり、今日に至っています。では、ヘブライ語聖書からの翻訳と70人訳聖書からの翻訳では、訳にどれほどの違いが生じるものなのでしょうか。

70人訳聖書の問題は、いくつもの写本があって、パウロが「神の靈感によって書かれた」と言ったものがどれかわからないということです。70人訳がほぼそろっている写本は、4世紀に作られた「バチカン写本」で、それ以前の写本は一部が欠けていたりします。そして、さらにそれ以前の写本の原文と使われ方を知る方法として、教父たちが書いた手紙に引用されている御言葉を調べる研究が行われています。

その結果、70人訳聖書の創世記5:6-7は、次のような訳であったことがわかりました。

「神は地上に悪が増大し、来る日も来る日も、誰もがみなその心の中で、ひたすら苦しみを抱いているのをご覧になった。それで神は、地上に人を造ったことを思いめぐらし、考えた。そして、神は言われた。『わたしは自分が作った人を地の表から消し去ろう。人から家畜に至るまで、這うものから空の鳥に至るまで。というのは、わたしはこれらを造ったことを思いめぐらしたからだ。』」

(創世記6:5-7 70人訳の私訳)

私たちが現在使っている聖書の訳と相当違っていることがわかります。これは、ヘブライ語が単純な言葉でありながら非常に深い意味を表す言葉であるからです。ですから、神の靈感が働かなければ、正しく訳すことはできないのです。

「ナーハム」という言葉には、前述のとおり「憐れむ、残念に思う、悔やむ、復讐する」などの意味があります。また、「悪」と訳されている「ラ」というヘブライ語は、日本語と同じように、「悪いことをする」「具合が悪い」「苦しい」などの意味があります。これがギリシャ語になると、何によって悪いのかによって、言葉が異なります。

その結果、当時の人たちは、最初の「ラ」を「カキヤ (増大する)」、次の「ラ」を「ポネーロス (病気によって苦しむ)」と訳しました。つまり、「悪が増大して、来る日も来る日も人々が罪という病気によって苦しんでいる状態をご覧になった神様は、なんとかしなければと思いつめぐらし、地上から人を消し去ろうという結論に至った」ということです。

その理由は、新約聖書のペテロの手紙Iを読むとわかります。まず人間は、すべての人が死んだ状態です。神は死んだ人間を生かすために御手を差し伸べますが、彼らは聞こうとせず、神の言葉に応答したのはノアの家族8人だけでした。悪が増大した中に彼らを放置することは、いのちの危険があります。そこで神様は、ノアの家族8人だけを助けるという決断をしました。

つまり、神は、人のした悪事を怒って滅ぼしたわけではありません。彼らは初めから滅びの状態にあったのです。しかし、このことは後の時代の人に誤解を与えてしまうため、神はこの時、永遠の契約を立て、私は裁く神ではなく救う神だと示されました。

神は決して、人を造ったことを悔やんで滅ぼしたわけではありません。人間のいのちを救うために思いめぐらし、究極の選択をなさったのです。イエス様は、旧約聖書が証しているのは私のことだと言っておられます。ですから、イエス様のメガネで聖書を読めば、ちゃんと昔も今も神の愛があふれていることがわかります。人間的な標準で読まないことが大切なのです。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」

(Ⅱコリント 5:16)

パウロは、回心する前、人間的標準で見たために、多くのクリスチャンを迫害しました。神様を知ろうとするときは、十字架のメガネで聖書を読まなければなりません。この世の標準に合わせ「罪には罰」というメガネで聖書を読むと、昔の神と今の神は違うように思えます。しかし、神は昔も今もいつまでも変わりません。もっとも誤解しやすいノアの洪水の話を通して、神の本当の思いを知り、神は罪に対して罰を与えるのではなく憐れむ方であることと、あなたをなんとか助けようとなさる神の愛を受け取って、安心して生きましょう。